

---

# 続・タバスコパスタ

さとうかなあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続・タバスコパスタ

### 【Nコード】

N0239F

### 【作者名】

さとうかなあ

### 【あらすじ】

一話完結、ナンセンス的エッセイ。ひまつぶしにどうぞ。あつ！  
・別にこれが私の本性じゃないからっ！誤解しないで下さい。あの、ほら、文章表現に凝ったらこんなになっちゃっただけですから  
・（汗）

## 日常の恐怖。

あの日は確かに、嫌な予感があった。

しかし、それはあまりにも漠然ぼくぜんとしていて、講じておくべき対策など考えようも無かった。

それほどに漠然としていながら、じんわり染み込んでくるような嫌な予感がその日にはあったのだ。が、私には日常を順調に送るべく使命があった。ゆっくり考える時間は取れない。

例えば洗濯。

例えば掃除。

例えば「あなた行ってらっしゃい」と、夫の出勤を見送ること。

例えば食洗機回し。

例えばペットの世話。

例えばワイドショーチェック。

例えば近所のおばさんの話に付き合うという町内会の掟おきてを遵守じゆんじゆすること。

例えば・・・しつこかったか。

私はそうして日々の任務をそれなりにこなしていた・・・はずだった。

しかし、この日は違っていた。

特に褒められもせず、後ろ指も指されずに進んでいたハズの任務中、心のどこかにジンワリと陣地を拡大していく「不安」。

何故だ？

答えは午後、明らかとなった。単身、足早に向かったスーパーの入り口。そこで事件は起きたのだ。

「あら〜！ お久しぶりい〜！！ お元氣だったあ？」

スーパーから出てきたばかりらしい中年の女性から声を掛けられた。見知らぬ女性であった。少なくとも私の知人に、このような極彩色を好む女性は少ない。

まして、スーパーの買い物ごときに、腕輪・首輪・耳輪・・・ついでに鼻輪もどうですか？ と言いたくなるほどジャラジャラと、金属をつける習性をもつ女性は皆無だ。

更に、彼女はスカートというのに素足に独特の靴下をはいている。足元だけのゴスロリ。この辺りまでの観察で、充分自分とは縁の無い人物と判断できる。

やんわりとかわしてスーパーに入ろう。この女性はもう帰るのだらうし。

しかし中年女性は食いついて離れない。

「やだあ〜、あなたのお家でよく会ったじゃない？ もう何年も経っちゃったから忘れちゃっても仕方ないけど・・・」

中年足元ゴスロリ女性は、かる〜く哀愁を漂わせた。待て、それは客観的に、私が冷酷なカンジに見えちゃうじゃないですか？

というか、この人、母繫がりの知り合いだったのだろうか？ だとしたら面倒だ。確かにこの女性、私より年上だ。面倒見の良い母は茶飲み友達が多かったし来客も多かったから、その中にいたのかもしれない。仕方ない、

「ああ、そう・・・でした？ すみません（笑）」

一応無難な返答はしたがやかいだ。私は母とは真逆の、他人に（いや、オバサマ方に）無関心人種であり、来客があっても数人一塊を『人々がいる』という認識をして済ませてきた。顔を合わせた事があつたとしても覚えていないはずはない。

バカバカバカバカ、私のバカ！

お買い得チラシに引き寄せられ、実家近くのスーパーに来ちゃつたおかげで、苦手分野に出会ってしまったじゃないか。

これから、買い物という軽いミッションに向かおうとしている矢先に、『オトク』に引き寄せられ、思わずラスボスに出会っちゃつたよ。というカンジだ。

終わった。

「あらあ、でも、お元気そうで良かったワ。お母さん、ご心配なさつてたから」

「そう・・・でしたか。（何を心配してたんだろっ？）」

「ご結婚なさつたの？」

「はい、もう十年になります（結婚式にはお呼びしていない方なのか・・・誰？）」

「そうなのお。まあ、それじゃベテラン主婦ねえ」

「いえ、全然・・・」

ソツなく返事を続けるにも、そろそろ限界だぞ。コアな話題に突

入したら「実はあなたの事しりませんでしたあ」という、恥ずかしい事を露呈ろていしかねない。母にも迷惑まごわづらひだろう。それより……。

それより、このスーパーの入り口。店内の放送が届きにくい距離のこの場所。

バツタリ出会って立ち話をする女性も多いが、ベンチに腰かけながら、目の前のバス停に立ちながら、いや立ち話をしながらでも、他人の会話を刻銘こくめいに聞き取っている人間は多い。

下手な行動に出て、このド派手な女性に恥をかかせては、今夜の夕食時しよりから、光 レッツを凌しのぐ早さでもって、人から人へ伝達されるだろう。

しかも、このド派手で、足元ゴスロリで、髪は昔の「ボヘミアン」なカンジで、メイクはグラデーション無しのマッドなブルー、口紅はこれもマッドなオレンジのオバサンは、存在だけでも、すでにプロローグは充分作りあげている。

何とかせねば。

「それにしてもねえ。今どき同居してくれるお嬢せこさんなんて、ありがたい事よねえ」

「ええ……」

同居？ お嬢さん？ 誰のこと？

私は確か、親と同居はしていませんよ。確実に婿取りではありませんし。

その女性はマジマジを私を見つめる。間違いない。全く見ず知らずの女性だ。

今の話題で、彼女も明らかに人違いと悟さとったのであろうか？ いや、私はまだ言葉にしていない。適当に合わせている。それでも女

性はますます私を食い入るように見つめる。ちょっとヤメてくださいいな気分なんですけど。

もしかして、その視線は私に助けを求めているという事だろうか。『ぶなん無難なエンディングにご協力お願いします』のサインなのか。それならそれで、協力は惜しみませんよ。だって、年上の女性に恥をかかせるのは、やっぱり失礼ですし。

「よくこちらのスーパーにいらっしやるんですか？」

今度はこちらから無難な質問を繰り出してみた。どうぞ適当に完結してください。

・・・しかし、まだその女性はマジマジと私を見たままだ。大丈夫か？

それとも話題に戸惑っているのか？

「私は、こちらにはあまり来ないので、おススメとかあったら教えてくださいね（ニコッ）」

まだ、女性は無言でマジマジを続けている。マジマジマジマジ、マジマジマジマジ……。

「……」

「……」

「……」

そして唐突に女性は叫んだ。

「あらあゝ！ 私！ 人違いしちゃったよ！ あっはははは・・・」

彼女はそのままクルリと背を向けると、立ち尽くす私を置き去りにしたまま、スタスタとその場を去ってしまった。

ダメージが・・・大き過ぎる。

「今日は帰るっ」



日常の恐怖。(後書き)

『一話完結』どころか、『一話で放置』にならなければ良いのです  
が……。

## 日常の誘惑。(前書き)

二話目できました。応援してください。た希少で優しい方々と、これから読んでみようかという勇気を持った全ての人々に心からの愛を込めて贈ります。(・・・あれっ、サンテクジュペリ入っちゃった)

## 日常の誘惑。

混み込みの市街地の商店街に、「安くて旨い」魚屋さんがある。

ウチからは車で出かけなきゃ・・・、という運転下手の私には、高リスクの買い物にはなるが、「ハイリスク・ハイリターン」のこんな時代。避けられない選択だ。

「魚は　　鮮魚店だよねー」

「あーっ、私もソコ！」

「やっぱり美味しいものは、わざわざ足を運ぶっていうことアリだよね」

「うん!」「うん!」「うん!」

・・・わんこ散歩中に会った奥様方の話題に、、、、最後まで入れなかった。

そうなると出かけるのだ。

皆そうだと思う。・・・絶対行きたくなくなると思う。間違いないからっ!・・・そうだよねえ!!

あっ、常軌を逸してしまうところだった(汗)。

そういうワケで、冒頭の鮮魚店へ、フンフンと鼻歌交じりに出かけたのであった。

駐車場は、細い脇道を入ったためんどくさい場所。「ええい、これ

しきで追い返されてたまるか」・・・誰も追い返す意図で作ったのではないだろう道路から、私には登呂遺跡の高床式倉庫に仕掛けられた鼠返しと同じニオイを感じた。

しかし、事実がどうであれ、教習所のクランクもS字カーブも、楽々クリアの私に、ド  
ンとそびえ立つ、両側の塀！！  
教習所には「塀」は設置してないじゃん。しかし、

「こんな所でリタイヤしてたまるか」

物事は根性で乗り切れる時もある。この時のハナシを手記として出版しようかと思うほど達成感のある通過であった。近いうち、市役所の道路関係課で、ここが「みなし道路」かどうか確かめよう。なつてなかつたら「すべきです」と一言添えよう。うん。

それはそうとして、「魚」だよ。買い物ごときで、何でもこう苦労してんだよ。スツと済ませろよ。・・・という声が聞こえてきそうなシチュエーションなので、車を止め、今どき常識の「買い物バック」をひっさげ目当ての鮮魚店へ向かった。

向かうつもりだった。いや、確かに向かっているが、

「待った？」

「ううん、来たばかり」

「よかった」

「なんか、久しぶりだね」

「そうなっちゃったね」

たまたま私の止めた車の近く、駐車場出入り口のそばの電柱の傍らで男女二人の密やかな会話が耳に入った。

ニュータイプじゃなくとも「ピピピッ」「っ」と脳波が反応します

的、デートの匂い。

路上で、日中から視覚的迷惑をかけているワケでもないし、なんの問題もないですよ。いえ、通りすがりの私ごときの賛否を確認する必要も無ければ、大きなお世話でゴメンナサイ状態ですよ。ホントにすみません。

こういうときは、「キキミミズキン」外さなきゃ。じゃない、着けてないし。というか、アレは動物及び虫、自然物の会話聞き取り装置だから、ますます関係ない。

とにかく、「かなあ、いつきまーす」と、心の中で区切りをつけつつ車のドアをロックしたのだ。鮮魚店への道は微妙な数の人々。

その時だ、私の背に違和感を感じたのはっ！

「きゃああああ

」

とは、言っていないが、もやあああんと、違和感。

「もやあああん」だと、チカン登場っぽいなあ、じゃ、「ぼわあああん」違う「ぼわあああん」・・・このへんでいいか。

私のパーソナル・スペースに、くつきり入り込んで、例の二人が付いて来る。何故？

鳥瞰図なら、いや、真横からでもいいけど、どう見ても三人連れに見える。スピードが偶然一致してしまったのか？ それとも、私が遅すぎて、追い越しそびれて困っているのか？

わかりました。足、速めます。しかし、

また、同じ距離を保つようにスピードをそろえてくる。

「何故だああ　？」

しかも例の二人は無言だ。さっきまでの、ちょっとした恥じらいも喜びも嬉しさも・・・、ありとあらゆるデート的なものを捨て去って、買い物奥さんのペースに合わせてくる。

試しに、もつとスピードアップを試みる。

・・・付いて来るっ!!!

何？　何？　どうして？　ナニ、この密着尾行！

私、盗ってませんよ。というか、まだ店に入っていないし。生まれでこの方、盗みとか万引きとか、やってませんよ!!!　と、叫びたくなるじゃないか。万引きGメン、カップルバージョンか？　それ以外、何？　あなたがた何？

それでも二人は歩調を合わせて付いて来る。早めても、遅めても付いて来る。

なんかもう怖い！

もう、早く店に入って、それでも不信な行動が続いたら店員さんにすがろう。

と、決意を固めたところで、大通りに出る寸前、二人の気配が消えた。スッ・・・。

恐る恐る振り返ると・・・いない！

鳥肌ビンビンの真昼の恐怖に浸りつつ、ふと目先に見える大通りの向こうには、墓地があった。しかし、そちらの住人ならもつと先で「スッ」とならない？　早すぎじゃない。というか、最初から待ち合わせ場所を墓地にしるよ！

怖いからアタマの中で抗議をしました、私。

しかし、余計なコトに気を取られて見落としていたが、「ピン！」と来て振り返ると、そこには和風のラブホが・・・ここで気配が消えたのなら理に合っている。

\*\*\*\*\*

私は回想した。

冒頭での男女は、ここに向かっていて姿をどうカモフラージュするかを迷っていたのだろう。あの年代はそうかも知れない。

どこかのお爺ちゃん、お婆ちゃん・・・いつまでもお元気で。

日常の誘惑。(後書き)

あ、あとがき…ですか。  
今度考えときます。ははは。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0239f/>

---

続・タバスコパスタ

2010年10月10日14時37分発行